

ではテノールになれる可能性が大きいね。ただし変声期が終わらない前に無理をすると声を潰してしまい、これはもう元に戻らないから気をつけなといけない。話し声の質と歌う声の美しさとは全然関係ないみたいだなあ」

そう言われてみれば、劇場で聞く山路氏の素晴らしく艶のある美声とふだんの話し声とは、ちょっとつながりにくいような気もしないではない。

バレエ

バレエの世界には「稽古を一日休むと自分にわかり、二日休むと仲間にはわかり、三日休むと観客にわかる」という厳しい戒めがあるのだそうだ。現在国際的に活躍中のプリマ・バレリーナ、森下洋子さんにウィーンでうかがった話を御紹介しよう。

世界中のいろいろな劇場で踊っていると、同じ役でも振り付けが違ふ事もあるでしょう。こういったステージでの動作は、演出家によってかなり厳密に指定されているものなのですか？

「そうです。振りつけの指定にはたとえばフォンテーンのもの、ヌレエフのもの、というようにいくつもの種類があって、劇場ごとに好みものを使っているようです。それをベースにした上で自分自身の表情や動きももちろんつけますけれど、そのあたりはパートナーと事前に必ず打ち合わせておかなくてはなりません」

一晚のステージだけでもかなりの量と種類の動作やパ（ステップ・踊り）をこなされるわけですが、それらはいったいどうやって覚えていくもののですか？

「最近ではビデオという便利な文明の利器があり、これを見ながら覚えます。速記のようにバレエのバを紙上に書いて残す、という特殊技術もあって、ロンドンのロイヤルバレエなどでは専門の授業もあるようです。音楽の流れに合わせて記号化されたバを楽譜にどんどん書き入れていくのですが、日本にも一人か二人それをこなせる人がいるらしいです。以前シウトウツトガルトで踊った時に、目つきの鋭いおばさんがじっと私の踊りを見ながら紙に書き込みをしていた事があったけれど、その人もきっとこの係だったんでしょうね。でも今はビデオ。その方が楽ですもの」

男性ダンサーと女性ダンサーとはどちらが大変ですか？

「これは間違いなく男性です。女性を持ち上げる、という力仕事がつきものだし、いろいろなヴァリエーションの中でもジャンプ力のいるパが多いし。だから女性は六十才を過ぎても主役を踊れないことはないけれど、男性は大体四十五才ぐらいまでかしら。ですからヌレエフなんて特別のケースでしょうね。比較的楽な脇役でも普通は五十五〜六十才が限度みたいです。男性ダンサーは女性をリフトする関係から腰を痛める率が高く、それが引退につながる事が多いようです。だから主役の男性って相手役のバレリーナが大きかったり重かったりすると、その人を断ってしまう事がよくあるんですよ。だって無理して腰をこわしたのが最後、その人のキャリアはおしまいですもの。私みたいに軽いのはこちらの人にとっては夢のようですよ」

女性の場合はどんな所に故障が起きやすいのですか？

「爪先で立ったり廻ったりする事からアキレス腱の横にある平目筋を痛めることが多く、それをそのままはっておくと結局アキレス腱までおかしくしてしまいます。本来爪先で体重を支えて動くのは人間にとって不自然なわけで、その助けとなるトゥシューズもなるべく足に合った良い物を選ばなければなりません」

トゥシューズというのは爪先の部分に芯が入っているのでしょうか？

「はい。よく『鉄の芯でも入っているのですか』なんて聞かれますけれど、そうではなくて、入っているのはボール紙です。ですからすぐ柔らかくなってしまってもたないんですよ。たとえば、『白鳥の湖』ですと私の出番は二、三、そして四幕。中でも三幕の黒鳥の部分は動きが激しくて、その幕二十分間だけで一足だめになってしまいます。どんな出し物でも一公演にトゥシューズ最低三足は必要で、その他予備を入れると十足ぐらいは楽屋に持ち込むことになるんです。だから旅行が続く時に何が大変かというところ、何回もの公演とリハーサル用合わせて何十足というトゥシューズを持って歩く事。トゥシューズ専門のニスというのもあるって、それを靴へ流し込むとまた少し靴が堅くなって使えるのですが、そんな事をやっているホテルの部屋なんてすぐ靴干し場みたいになってしまいうんですよ。平均してみると私の場合は年間約三百足のトゥシューズを使うので靴代だけで百万円ぐらいかかってしまいうんですよ。でも靴をケチると足を痛めて腱鞘炎になったりするので、こればかりは節約できません」

バレエもなるべく早くから始めた方が良いでしょうね。

「何才ぐらいから始めるのが良いか、という判断はとっても難しくって一概には言えないのですが、筋肉を慣

らす、という観点から言えばなるべく早い方がいいでしょうね。でも小さい頃の無理は関節炎のもとになる事が多い。そうねえ、私は三才の時からバレエをやっているけれども外国では七、八才から、というのが多いのではないかしら」

やはり才能のあるなし、というのは教えていてもはっきり出てきますか？

「もちろん。運動神経は鍛えればある程度の所まではいくのね。でも音楽性というか音感、リズム感は教わってできるようになる物ではないみたいです。リズム感がないと振りひとつ覚えるのにも時間がかかってしまうのね。あとは『舞台の華』^{はな}ともいえるステージ上での印象。こればかりは天性のものようです。我々の間ではよく『稽古場美人』と呼んでいるのだけれど、リハーサルの時には素晴らしくても、いざステージに立つと何ともくすんでしまう人がいます。性格的な要素も関係してくるのかしらね」

練習はやはり毎日ですか？

「基本的にはそうです。私の事を言えば最近では『筋肉を休める』という意味もあって稽古を休むことはあまりすけれど、自宅でも、旅先でも、飛行機の中でも、筋肉を伸ばしたり、その他各種の柔軟体操だけはどんな時でも絶対欠かしません。私、お酒も大好きでよく飲みますが、いくら楽しくても深酒と翌日の稽古とどちらをとるか、と問われれば、これは議論の余地なく稽古の方が大切で、不摂生だけはしたくてもできません」